

十三年になる研究歴をふりかえってみると、はじめの一、二年はともかく、その後は先人の理論に対して疑問をもつ態度をもち続けてきた。社会・歴史に対する従来の理論を借りて諸現象を説明することも、過去の人類の知恵を生かすためにきわめて重要ではあるが、その範囲内にとどまっていたのでは、研究する意味はない。既成の理論をよく理解すると同時に、それを抜んでた把握が必要である。事実の蒐集においてか、新しい理論の創造においてか、なんらかの形で先人の到達した水準をこえねばならない。ここに創造力が必要となる。創造力は多くの場合、事実を直視し、既成の理論に不満をもつことから生れる。この意味において、私は非常識的であったが、それを正しいと思っている。旧著『日本封建経済政策史論』（昭三四）は、当時の諸理論に対する諸疑問から構成された一体系であり、刊行当時はかなり手ひどい評価をうけた。しかし、まだ認められていない主張もあるが、いくつの命題はいまでは通説化してしまっている。当時の学界の常識のた

めに無視されていた命題が、今になって目のをみるといった現象もある。

生活においては常識的である私を、研究においては非常識な態度を取るにいたらせた原因は、青年期に敗戦に伴う旧価値観の崩壊の精神的苦悩をまともに受けたことに



私の研究

連続と非連続

安岡重明

よると思う。単純な心に疑うことを覚えさせたのは、これである。私は、安易な発展段階論に対して、日本社会の展開を連続において把握しようとしている。現在研究している資本形成史もこの観点から行っている。連続の面で歴史をとらえたら、社会の飛躍とか変革とかの条件が脱落するのでは

ないかという疑問がでるかと思うが、実はそうではない。連続的な諸側面を正当に位置づけたときにこそ、変革の意味がはじめてあきらかになるのである。社会の変化において、一切適切なにもが全部かわることはない。政権の交代はいつきよになされても、下部の社会、経済は比較的長期にわたって変化するのが普通である。われわれのように社会のもっとも基底的な分野を研究するものは、変化を連続性において把握し、変化・変革の意味をさぐらねばならない。

これは困難なことである。近世史の専門家とか、近代史の専門家とか、時代別に分類されることが多い。ある時代の静態的なイメージは比較的作りやすいが、変革期のそれは作りにくいからであり、学者もこうした困難な命題から逃避しがちであることを物語っている。奇をてらうのも一種の發育不良であるが、主流の見解に追従することほどつまらぬことはない。常識的な研究をやっている、非常識が学者の特権であるような顔をする権利はない。学者も一個の市民である。

（商学部助教授・日本経済史）

大学の卒業論文に二十世紀のアメリカ作家シンクレア・ルイス (Sinclair Lewis) を取り上げて以来、私はアメリカ文学 (特に現代アメリカ小説の虜^{とりこ}になっている。アメリカ中部の中産階級の生活をリアステイックな手法で克明に描き、浅薄なアメリカ文明を軽妙に諷刺したルイスの諸作品を読んでゆくうちに、アメリカ文学のリアリズムに興味をおぼえ、その発生期 (十九世紀後半) まで遡^{さかのぼ}って行った。アメリカにおいてはじめてリアリズムを唱導、育成したウィリアム・デイン・ハウエルズ (William Dean Howells) をかじって、彼の文学理論に感心しながらも、社会の暗黒面や人間の本能欲を意識して避け、健康で道徳的な生活のみを描こうとするその楽天主義に物足りないものを感じつつ、次のフランク・ノリス (Frank Norris)、ハムリン・ガーランド (Hamlin Garland)、ステイブン・クレイン (Stephen Crane) へと移って行った。このあたりに来ると、南北戦争後のアメリカ社会の変貌が強く文学の世界へ反映して来る。資本制産業主義の急速な発展にとも

ない、生産地帯が拡大して、各地に新興都市が輩出し、農村からやって来た人々やヨーロッパからの移民で都市の人口は膨張し、労働市場に多くの労働力を供給した。こうして表面的には繁栄の一途を辿るアメリカであったが、その裏には、全国的支配



アメリカの

自然主義文学

岡野久二

をめざす鉄道会社に食いのにされる農民や、人口増加によって低賃銀にあえぐ労働者の悲惨な姿があった。こうした状況が一九八〇年代及び九〇年代に至ってヨーロッパのリアリズム文学を吸収する素地をつくりあげた。フランス、ロシア、ドイツ、北

欧のリアリズム文学が何らの抵抗も受けず導入されたが、中でも大きな影響を与えたのがゾラの自然主義であった。ノリスはゾラの文学理論をそのままアメリカの土壌に移植しようとして失敗したが、ガーランドやフレインは巧みにそれを消化してアメリカ的な自然主義を生み出した。それが二十世紀のはじめシアード・ドライサー (Theodore Dreiser) に至って見事に実を結んだのである。ドライサーには、ノリスのような芝居気もなければ、クレインのような器用さもない。しかし、猛牛の如く鈍重ではあるが力強く、アメリカの社会機構の中で踏みにじられながらも生きぬこうとする弱い人間の姿を描き続け、そこに人生の謎を解く鍵を見出そうとする彼の文学には限りなき魅力が秘められている。私がドライサー文学に親しんで以来すでに十年を越える。彼の文学に関する研究論文もいくつか発表したが、まだ彼から離れられそうにない。一生彼の文学に食らい付いていることになるかも知れないが、それもまた楽しいことである。

(昭二五英卒・女子大教授)